声なき感染症を知る ◆44◆

インフルエンザワクチン

重症化の予防に効果

なるべく年内接種を

県感染症情報センター

インフルエンザは冬の代表的な感染症のひとつです。昨年はこの時期、「例年より早いインフルエンザの流行開始」を取り上げましたが、今年はワクチンに関する話題です。

▽ワクチン接種の意義

「ワクチン接種を受けたのに、インフルエンザにかかってしまった」という話を耳にすることがあり、ワクチン接種を迷う方もおられると思います。

ワクチンの効果、ワクチン接種の意義とは、どのようなものでしょうか。

①感染後の発病を予防

インフルエンザにかかる時は、ウイルスが口や鼻、あるいは眼の粘膜から体の中に入ってくることから始まります。体の中に入ったウイルスは、次に細胞に侵入して増殖します。この状態を「感染」といいますが、ワクチンには、これを完全に抑える働きはありません。

ウイルスが増えると、数日の潜伏期間を経て、発熱やのどの痛み等のインフルエンザの症状が出現します。この状態を「発病」といいます。ワクチンには、この「発病」を抑える効果が一定程度認められています。ただし、麻しんや風しんのワクチンで認められているような、高い発病予防効果を期待することはできません。

②重症化を予防

発病後、多くの方は1週間程度で回復しますが、なかには肺炎や脳症等の重い合併症が現れ、入院治療を必要とする方や、死亡される方もいます。これをインフルエンザの「重症化」といいます。

特に基礎疾患のある方や高齢の方では、重症化する可能性が高いと考えられています。

▽ワクチンの効果

ワクチンの最も大きな効果は、「重症化」を予防することです。

インフルエンザによる入院の実態調査（インフルエンザ入院サーベイランス：厚生労働省）によると、入院患者の多くは高齢者と小児（特に乳幼児）です。

また、慢性の基礎疾患のある方で、著しく免疫が抑制されている方も、重症化のリスクが高いとされています。

▽ワクチンの効果

国内の研究によれば、65歳以上の高齢者福祉施設に入所している高齢者について、34～55％の発病を阻止し、82％の死亡を阻止する効果があったとされています。

一方、乳幼児におけるインフルエンザワクチンの有効性に関しては、概（おおむ）ね20～60％の発病防止効果があったという報告があります。また、乳幼児の重症化予防に関する有効性を示す報告もみられます。

ただし、乳幼児をインフルエンザの感染から守るためには、ワクチン接種だけではなく、乳幼児がインフルエンザウイルスにさらされる機会をできるだけ減らす心掛けも大切です。家族や周囲の大人たちは、手洗いや咳（せき）エチケットを徹底し、流行時期は人が多く集まる場所に行くことをできるだけ控えて、ウイルスを持ち帰らないようにしましょう。

▽4価ワクチン

現在、国内で広く用いられているインフルエンザワクチンは、インフルエンザウイルスA型株2種類とB型株2種類の計4種類のウイルスを、それぞれ培養して製造されているため、「4価ワクチン」といいます。

A型は、平成21年に「新型インフルエンザ」として流行したウイルスと、「A香港型」と呼ばれるウイルスです。B型は、免疫の反応が異なる2種類のウイルス（「山形系統」と「ビクトリア系統」という二つのタイプ）です。

インフルエンザワクチンは、そのシーズンに流行することが予想されるウイルスを毎年検討して、製造されます。

▽供給の遅れ

今年は、1カ月ほどワクチンの製造スケジュールが遅れたため、供給にも遅れが生じました。これは、4価のうちのA香港型について、従来のウイルスよりワクチンの効果が高くなるウイルスをいったん選定したものの、後になってウイルスが大量生産できないことが分かり、前のシーズンと同じウイルスでワクチンを作ることに切り替えるよう、方針を変更したことによります。

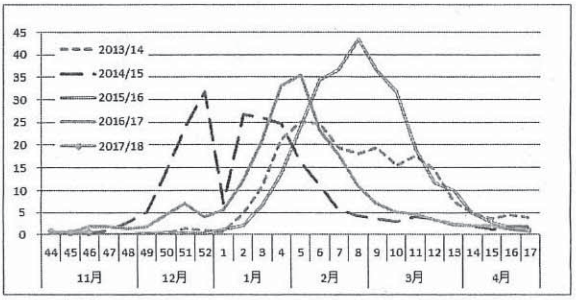
当初、ワクチンの不足が懸念されていましたが、ワクチンメーカーによる供給の前倒しや増産などもあり、厚生労働省によると、今シーズンの供給予定量は、昨年度の推計使用量とほぼ同量になると見込まれています。

▽接種後2週間で効果

今年はワクチンの供給が遅れていたこともあり、ワクチン接種を受ける予定であったのに、まだ受けられていないという方もおられると思います。

インフルエンザの流行は、例年1月に入ると急激に拡大します。接種してから効果が現れるまで2週間程度かかることを考えると、ワクチン接種を受ける場合、事前に医療機関へ問い合わせの上、できるだけ早く、可能であれば12月中に接種しておくことをお勧めします。

（県感染症情報センター）



奈良県におけるインフルエンザの発生状況（県感染症発生動向調査から）（※注）「月」は2017年におけるもので、他の年は若干前後する